

87. 滋賀県下の古墳出土鏡について(3)

4. 近江八幡市千僧供養塚古墳出土鏡

近江蒲生郡志卷壹に「大字千僧供の曼多羅堂跡の畔に一古墳あり、寛文中其地を領せし福富平左衛門之を発掘せしめし事近江輿地志略に見ゆ」として、近江輿地志略の文を載せ「此文によれば石堀内に石棺は無く、人骨と古鏡、太刀、管玉類を発掘せしを知る」とある。なお、蛇足を加えれば、この輿地志略の記事は福富の家が断絶したのは、高貴の墓をあばいた報いであると言うためのもののように見える。この鏡に関しては現在何ら知る由もない。

5. 沙々貴神社旧蔵鏡

近江蒲生郡志卷壹に「元沙々貴神社の重宝たりし七鈴鏡(割註)『文久の頃神社より八幡町の富豪西川某の手に移り近年長浜中村氏の有に帰せり』の如きも按ずるに必ず沙々貴山中の古墳中より発掘して社納されし稀代の珍重ならん」とある。この割註にある長浜中村氏とは、京都にて骨董商を営まれる中村氏ではないかと思われるが、西川氏より中村氏の手に渡った時期も不明であり、鏡も七鈴鏡とあるだけで、大きさや鏡背の文様等も一切わからないのでその調査をしていない。ただこのような記事の存在することだけを述べておく。

6. 安土町瓢箪山古墳出土鏡

安土町の瓢箪山古墳は、多くの古墳に関する論考で言及されている有名な前方後円墳である。この古墳に関しては「滋賀県史蹟調査報告第7冊」において、梅原末治氏の「安土瓢箪山古墳」なる詳細な報告がある。なお、この調査に先立って同氏が「近畿地方古墳墓の調査」(日本古文化研究所報告第4)においてその大要を報せられ、概要にもこの古墳に関する項がある。また、出土遺物は京都大学に所蔵されており、京都大学文学部の「考古学資料目録2」に写真と説明が記載されている。従って、その詳細はすべてこれらに譲りここでは再説することを避け、出土鏡についてのみ述べることにする。鏡は昭和11年7月の調査で2面出土している。前述の梅原氏の県史蹟調査報告では、径約5寸(15cm)の夔鳳鏡と、径4寸4分(13.4cm)の二

神四獣鏡(二神龍虎鏡とも述べられている)で、共に舶載鏡としておられる。なお、夔鳳鏡には鈕をめぐる四葉形内に「保子宜孫」の銘がある。これは後藤守一氏「古鏡聚英」田中琢氏「鐸・剣・鏡」(日本原始美術大系4)樋口隆康氏「古鏡」等にも収載されている。この夔鳳鏡については何ら加えることはないが、もう一面の神獸鏡に関しては留意すべき点がある。まず鏡背の文様であるが、最近の諸書を見ると二神二獣鏡となっているものが多い。樋口氏の「古鏡」でも、田中氏の「古鏡」(日本の原始美術8)でも二神二獣鏡として収載されている。次に報告書では舶載鏡となっているが、最近では仿製鏡と考えられるようになってきた。例えば前述の田中氏の「古鏡」において「滋賀県安土瓢箪山古墳鏡や福岡県丸隈山古墳鏡は舶載の二神二獣鏡を、奈良県佐味田宝塚古墳鏡は同じく二神四獣鏡を模倣したことは確実だが」と述べており、樋口氏の「古鏡」でも、仿製鏡の部にこの鏡があり図版もこれに対応している。従って報告書とは異なるが、仿製の二神二獣鏡として挙げることにする。

坂田郡・長浜市の古鏡

1. 米原町石測山古墳出土鏡

石測山古墳は米原町河南にある竪穴式石室を持つ前方後円墳であることが、島田貞彦氏「近江國坂田郡の二古墳に就て」(考古学雑誌9-4)に報告されている。同氏の報文によると、大正7年3月に石灰石原料の採取路を作る工事中に発見された由で、内行花文鏡と共に金環等の副葬品があったことが知られる。このことは滋賀県史にも触れ、改訂近江國坂田郡志では、この鏡について更に詳細に報告されている。鏡は径が11.7cmで、前述島田氏の報文では和鏡となっているが、最近の田中琢氏の教示では舶載とすべきであろうとのことである。現在米原町河南の澤吉朗氏が2個の金環と共に所蔵されている。

2. 近江町山津照神社境内古墳出土鏡

近江町能登瀬の山津照神社の境内にある前方後円墳から明治15年8月神社境内拡張工事中に3面の古鏡をはじめ多くの副葬品を発見している。この詳細は島田貞彦氏が「近江國坂田郡能登瀬の古墳」(歴史と地理15-3)で述べられているのでそれに譲り、ここではそのうちの3面の古鏡についてその概要を述べることに

とする。なおこの古墳については、若林勝邦氏「近江能登瀬の発見品」（考古界1）や近江国坂田郡志・滋賀県史・概要にも述べられている。鏡は3面とも仿製鏡で、径7.1cmの内行花文鏡、径13.2cmの五獣鏡、径8.5cmの五鈴乳文鏡である。五獣鏡には擬銘帯がある。すべて山津照神社の所蔵で、現在県立琵琶湖文化館に保管されている。これらの鏡については、内行花文鏡と五鈴鏡は富岡謙蔵氏「日本仿製古鏡に就いて」（古鏡の研究所収）に、また3面とも後藤守一氏「漢式鏡」に、さらに樋口隆康氏の「古鏡」にも鈴鏡が収載されている。

3. 近江町新庄薬師講所蔵鏡

近江町新庄塚の越古墳出土と伝えられるものである。しかし、この鏡に関しては二三疑問の点がある。まず近江国坂田郡志（改訂版も）で同古墳出土として、四神四獣鏡のスケッチを挿図に載せているが、本文を見ると同古墳出土品中には古鏡は存在しない。すなわち明治18年に金雞の伝説で盗掘が行なわれているが、これを知った地主の堤彦七氏が、これらの盗掘品を集めて保存されていた。その中には鏡は含まれていないのである。後、明治24年に臨時全国宝物取調局の関係者によってこの出土品が調査されているが、その際の書類にも鏡は見当たらない。また、島田貞彦氏の「近江国坂田郡能登瀬の古墳」（歴史と地理15-3）の附記にこの古墳の出土品が述べられているが、それには「就て見ると装具・馬具・刀剣鉄等の残缺多量と玉類等である」と報ぜられていて、鏡は存在しない。以上のごとく記録からは郡志の挿図の説明以外古墳の出土品中に鏡は存在しないこととなる。さらにこの鏡の実際について見るに、果して永年の土中にあったものかどうかと疑わしめるような状態であることも疑問点として挙げるべきであろう。滋賀県史には郡志によったのであろう、息長村大字新庄塚ノ越の前方後円墳から古鏡が出土していると述べているが、概要には全然ふれていない。なお、後藤守一氏の「漢式鏡」では「息長村大字新庄小字塚ノ越発見の神獸鏡は略図によって知るのみ云々」とあり、同氏が実物には全然接しておられないことを知るのである。

4. 長浜市垣籠古墳出土鏡

長浜市垣籠町の垣籠古墳は、通称王塚と呼ばれているもので、早く明治15年に一部が開墾され、さらに明治35年9月に再び鎌が入れられ鏡その他が発見されたのである。その詳細は岩井堂堂氏「近江国坂田郡北郷里村字垣籠古墳に就きて」（考古界7-11）に報告されている。なお、滋賀県史・坂田郡志にも述べられている。岩井氏はその文中で鏡について「鏡一面、純然たる漢鏡にして、木板に挟みて埋没し在りしと言へども、裏面は腐蝕磨滅して其模様等を知る得ざれども、

大小十個（五對ならん）の乳を有し、裏面へ反りあり、直径四寸五分、質は白銅也」と述べている。また富岡謙蔵氏は「日本仿製古鏡に就いて」（古鏡の研究所収）の乳文を主とせるものとしてこの鏡を挙げ、後藤守一氏「漢式鏡」には「近江国坂田郡北郷里村字垣籠発見變形文鏡（乳文鏡）は鐘の為め文様は明でない」と述べている。これらから仿製の乳文鏡で、径約13.6cmであることが知られる。この鏡は後宮内省の有に帰したが、改訂近江国坂田郡志によれば、大正12年の関東大震災で無くなった由が述べられている。

東浅井郡の古鏡

1. 虎姫町丸山古墳出土鏡

昭和53年9月虎姫町三川の丸山古墳で、圃場整備事業に伴う関連工事中に発見された鏡である。この古墳やその出土遺物については近く報告書が公にされる予定であるので、詳細はそれに譲りたい。径11.5cmの獣帯鏡で舶載鏡である。滋賀県教育委員会が所蔵している。

2. 浅井町今莊出土鏡

滋賀県遺跡目録（昭和55年）に「今莊遺跡 円墳12基 須恵器鏡馬具」とある。しかしこの鏡については遺跡目録以外には何ら伝えられていない。従って事の真偽は現在のところ不明と言わざるを得ない。昭和40年度作製の遺跡目録から見られるので、この目録を作製した際の関係者の教示を得たいと思っている。

3. 浅井町塚原古墳群出土鏡

浅井町醍醐塚原古墳群出土と伝えられ、現在浅井中学校に保管されている仿製の内行花文鏡で、径9.4cmを計る。この鏡については何ら文献もなく、発見年月も不明であり、鏡背に大きく「145」なる数字が書かれているが、これが何の番号かも不明である。しかも一部が欠失しているのが現状である。ところが、最近齋藤忠氏撮影の写真に浅井中学校に保管されている子持勾玉とともに写されている完全な同鏡の写真があること

が判明した。これには「145」なる数字も書かれていない。従って、最初は二つに割れてはいるが完全な形であったことが知られるのである。大方の参考にと資するため齋藤氏撮影の写



塚原古墳群出土鏡 齋藤忠氏写真

真を示すこととする。

4 浅井町雲雀山古墳群出土鏡

浅井町山ノ前雲雀山2号墳及び3号墳からそれぞれ1面の獸文鏡が出土している。これは昭和25年4月に大阪市立大学文学部歴史学教室が学術調査を行った際発見したものである。これらに関しては、直木孝次郎、藤原光輝両氏の「滋賀県東浅井郡湯田村雲雀山古墳群調査報告」（大阪市立大学文学部歴史学教室紀要）にその詳細が報告されている。2号墳出土鏡は仿製の五獸鏡で径11.7cm、3号墳出土鏡は仿製の四獸鏡で径は10.7cmである。

5 浅井町田川元山出土鏡

浅井町田川の元山古墳で大正3年9月に発見された径7.5cmの仿製の珠文鏡の破片である。現在東京国立博物館の所蔵に帰している。なお、同博物館の記録によれば、伴出遺物として碧玉管玉6、蠟石勾玉5があったことが知られる。これは後藤守一氏の「漢式鏡」にも記載されているが、同書では元山が元山となっている。（これは恐らく校正のミスであろうと思われる。）滋賀県史でもこの古墳のことにふれており、前記雲雀山古墳群の調査に関連して、調査報告書の第一章でこの元山古墳についても述べられている。

6 湖北町種路古墳出土鏡

湖北町山本の種路古墳で発見された仿製の四神鏡で径は8.6cmである。伴出遺物として、所蔵者の東京国立博物館の記録では、碧玉管玉2、瑪瑙勾玉1、金環1が挙げられている。なお、この古墳は滋賀県史でもふれている。鏡に関しては、富岡謙蔵氏の「日本仿製古鏡に就いて」（古鏡の研究所収）において「神人鏡の變形せる著しき例としては、近江國東浅井郡種路村発見の一鏡（東京帝室博物館蔵）にして……神像の頭部は圓紋状を呈し、軀部は一龍龍騰様の花形をなせり」とその特殊性を述べている。また、後藤守一氏の「漢式鏡」では、文献として富岡氏の論文をあげ、變形文鏡として「變形文は恐らく神像形の變形せられたものであらう」と述べている。なお、同氏の「古鏡聚英」や樋口隆康氏の「古鏡」にも記載されている。

7 東浅井郡内出土鏡

富岡謙蔵氏「日本仿製古鏡に就いて」（古鏡の研究所収）の四獸鏡に関する一覽の中に「近江國東浅井郡據濱田君報告」なる一行がある。しかし、これについてはこれ以上のことは不明である。

伊香郡の古鏡

1 高月町涌出山出土鏡

昭和54年1月、高月町唐川の涌出山で北陸縦貫自動車道建設に伴う採土作業中に発見された古鏡である。この古鏡及び出土遺物の詳細は近く滋賀県教育委員会

によって報告されるはずであるので、それぞれはそれに譲って、ここでは古鏡出土の事実だけを簡単に述べることとする。仿製の乳文鏡で、径は7.9cmを計る。滋賀県教育委員会の所蔵である。

2 木之本町大音出土鏡

近江伊香郡志上巻の第三章古代篇の中の伊香具村の古墳の項に「第三に大字大音にあっては、其の背後の小字谷川、堂角、越前等に遺跡の存した名残をとどめている。前二者は共に南に羨道を開いた横穴式石室が既に大半破壊せられて、玄室の一部をのこすに過ぎず、字越前にある一基また相似た状況にある。但し、この塚は今より50余年前、発掘の際鏡を見出したと伝えて注意を惹く」とある。これは当時すでに単なる所伝となっており、その詳細はすべて不明であることを示しているのので、一応そのことを記するにとどめたい。

3 木之本町古橋出土鏡

木之本町古橋の古墳出土と伝えられる古鏡が、現在福井県敦賀市にある私立敦賀博物館に所蔵されている。仿製の四獸鏡で、径は15.3cmある。この鏡に関しては何等記録はなく、出土の詳細や伴出遺物等は一切不明である。筆者はかつて福井県教育委員会の中司照世氏から同鏡の拓本コピー、写真、実測図を頂戴した。それによると、鏡面に布帛が付着している由である。県下出土鏡でありながら県内ではあまり知られていない鏡である。

県下出土の古鏡について

拙文は、近江風土記の丘資料館で公開される図録に関連して、県下出土古鏡の概要を述べるのが目的であった。従ってここではそれからは少しはずれるかもしれないが、県下の古鏡の出土状況から考えられる二三の問題点を指摘して結びにかえることとする。

県下の古鏡は野洲川下流域に圧倒的に多い。しかもここでは他に見られない大形の三角縁神獸鏡類がある。古代の近江において、近淡海国造と近淡海安国造が国造として史上に現われる二大雄族である。国造本紀の額田国造を湖北地方に当てる説もあるが、これは確実とは言えない。筆者は、近淡海国造を湖西南半の和邇川流域以南を中心とする地、近淡海安国造を野洲川下流域を中心とする地をそれぞれ本拠地とするものと考えている。この場合、和邇川以南では現在わかっている確かな鏡の出土古墳は大塚山古墳だけである。しかしこの地の場合は、鏡を副葬する可能性がある古墳のほとんどの内部構造や副葬品が全然知られていない。従ってこの地に関しては、現状を基礎にして論を進めることは非常に危険であろう。これに対し野洲川下流域においては、鏡を出土する古墳の数や、その出土した鏡の数も多く、鏡の内容もまた豊富で、一応現状で

当時の姿を考えることは可能であろう。野洲を中心として、瀬田を含めた昔の栗太・野洲の両郡からは、大形の三角縁神獸鏡から小形の仿製鏡に至るまで、確かでないものを除き、総数33面の鏡が出土している。これは数において他地域を大きく引離している。しかもここには、瀬田織部山古墳1面、六地藏岡山古墳1面、出庭亀塚古墳1面(仿製)、小篠原大岩山古墳2面、同天王山古墳1面(仿製)(大岩山、天王山両古墳は従来の呼称による)、富波古富波山古墳3面、伝三上山下古墳2面の同範鏡・踏み返し鏡が含まれている。(小林行雄氏の、古墳文化論考付表及び帝塚山大学考古学談話会記念講演会要旨付表による。)このことは、この地の古代雄族の地位や勢力を物語の一つの有力な根拠である。

ところで、野洲の地はまた銅鐸の出土でも有名な処である。即ち、野洲町小篠原桜生において明治14年と昭和37年の両度をあわせて24個の銅鐸が出土したことは、銅鐸研究史上特筆すべきことである。そのほか新庄でも4個出土したことが伝えられており、そのうちの1個は、神戸桜ヶ丘や鳥取県泊その他との同范関係で有名である。さらにその周辺にまで範囲を上げると、草津市志那(野洲川旧河道に近い)の湖底で1個、野洲町に隣接する蒲生郡竜王町山面で2個の銅鐸が見られる。また、最近の調査で斯界の注目を集めた守山市服部遺跡の総数360基を数える弥生時代の方形周溝墓群を始めとする各種の古代遺跡や遺物も、野洲地方の古代を考える上での貴重な資料を提供するものであろう。このような弥生時代以来のこの地の繁栄が、古墳時代における鏡の出土と結びつくことは充分考えられるところである。このように、古墳時代における野洲川下流域が大きな勢力を誇った地域であることを、この地出土の古鏡が物語っているようである。

次に、神崎郡・八日市市・愛知郡・犬上郡・彦根市からは一面の鏡も出土していない。しかし、このことから、この地域に鏡が無いと速断することはできず、将来発見されるかもしれないが、それでも、現在全然知られていないと言うことは、やはり古鏡の存在が他に比して少ないのは否定できないであろう。依知泰公等の渡来系氏族を中心とすると思われる、愛知川から犬上川にかけての地域における、古墳時代後期の多数の群集墳や、歴史時代に入ってから古代寺院の稠密な分布状況から見て、古鏡から見た古墳時代前期の姿はあまりにも淋しいのである。これがこの地の古代の歴史とどのように結びつくのか、今後の研究課題の一つであろう。

湖北から高島郡にかけては、少数の舶載鏡を含む仿製の小形鏡の出土がかなり見られる。この地域は継体朝成立と重要なつながりを持っているので、この地域

の古墳時代の姿は、継体朝成立の解明に欠くことのできない一要素であろう。現在湖北や高島郡から出土した古鏡は、野洲川下流域とは大分差があるようである。しかし、息長真人系の人々と結びつく長浜市の東部地域には、内部構造の不明な大形古墳もあり、高島郡の三尾君と結びつく田中古墳群を中心とした古墳群の解明と共に将来に問題を提起するようである。

以上紙幅の都合で大変大雑把な問題提起に終り意を尽さないが、古墳出土鏡を通じて県下の古墳時代前期を中心とした時代の姿を少しでも明らかにすることができればと思っている。その為にも先ず出土鏡を正しく把握することが必要であろう。幸い古鏡の図録が刊行されるので、この機会にこれまでに調べた一端を述べ、大方の御教示を戴きたいと思う次第である。

古鏡の調査に当っては多くの人々から御援助を得た。特に、奈良国立文化財研究所の田中琢氏からは有益な御教示を得ると共に、同研究所所蔵の圖書の閲覧にも特別の御高配を戴いた。また、齋藤忠氏、中司照世氏からは写真の御惠贈を受けた。そのほか、下記の方々からそれぞれの鏡の調査に関し、御教示や御便宜を得た。ここに記して感謝の意を表したい。

小林行雄氏、樋口隆康氏、川西宏幸氏、宇野茂樹氏、京都国立博物館の鈴木博司(現山口大学)、八賀晋、稲田和彦の各氏、滋賀県立琵琶湖文化館の石丸正運(現県立美術館設立準備室)、上野良信、桑山俊道、高梨純次の各氏、県教委文化財保護課の丸山龍平、大橋信弥、田中勝弘、兼康保明の各氏、近江八幡市郷土資料館の江南洋氏、安曇川町教委中江彰氏、長浜市教委宮成良佐氏、県文化財保護協会の辻広志(現中主町教委)、岡本隆子の両氏、水口町中西利弘氏、米原町河内美代子氏、浅井町木下千秋氏、鏡の所蔵者である安曇川町田中神社、中主町兵主大社、米原町澤吉朗氏、浅井町浅井中学校

さらに近江風土記の丘資料館の秋田裕毅氏からは、今度の展覧や図録の作製に関連して、鏡の調査について格別の御高配を得た、あわせて謝意を表わす次第である。

追記 拙稿が印刷所に送られて後、本村豪章氏「古墳時代の基礎研究稿——資料篇(I)——」(東京国立博物館紀要第16号)の滋賀県に関する部分を見る機会を得、その中に彦根市正法寺町出土鏡1面のあることを知った。明治40年9月に横穴式石室から鉄刀・馬具・須恵器と共に発見されたようである。これについては今後の調査に待ちたいが、とりあえずここに追録して大方の参考に資したい。

(西田 弘)